

「伊勢物語」 ver. 1

便覧 116 ページ参照

作者 未詳

ジャンル 歌物語

内容 約百二十五段からなり、約二百十首の歌を詠む。

「ある男」（Ⅱ在原業平）の一代記風の構成。

動詞

赤文字

助動詞

緑文字

形容動詞

紫文字

助詞

青文字

その他の品詞

橙文字

東下り

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなし
昔、男がいた。その男が、我が身を必要のないものに思い決め

打消意志・終止

て、京にはあら

じ

かた

、東の方に住む

適當・連体

べき国求めに、と

て、京にはいまい、東国の方に（自分が）住むのに良い国を探しに（行こう）、と

て行きけり。もとより友とする人、ひとりふたりして行き
思って出かけていった。前々から友としている親しい人、一人二人と一緒に

ラ行四段・命令・存続・連体

けり。道知

れ

る

人もなくて、惑ひ行きけり。三河の

た。道を知っている人もいなくて、戸惑いながら行った。三河の

国、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水
国、八橋というところに着いた。そこを八橋と言ったのは、水の

ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つ **渡** **せ** **る** によりて

サ行四段・命令 存続・連体

流れゆく川が蜘蛛の足のように分かれているので、橋を八つ渡してあることによ

係助詞

なむ、八橋といひける。その沢のほとりの木の陰に下り

係結び

って、八橋と言った。その沢のほとりの木の陰に（馬から）

ワ行上一・連用

み

かれいひ

て、乾飯食ひけり。その沢に、かきつばたいと

下りて座って、乾飯を食べた。その沢の、かきつばたがとても

形容詞ク活用・連用

おもしろく咲きたり。

存続・終止

それを見て、ある人のいはく、「か

心惹かれる様子で咲いている。それを見て、ある人が言うには、「か

いつもじ

きつばた、といふ五文字を句の上に **据** **ゑ** て、旅の心を

ワ行下二・連用

きつばた、という五文字を各句の最初において、旅の心を

よめ。」と言ひければ、**よめ**る。

詠め。」と言ったので、詠んだ(歌)。

①から衣②着③つつなれにし④つましあれば

⑤はるばるきぬる⑥旅をしぞ思ふ

から衣をくりかえし着ているうちになよやかに萎えてしまったように、慣れ親しんできた妻が都にいたので、はるばる来てしまった旅をしみじみと思うことである。

○から衣は**着る**を導く**枕詞**

○から衣着つつは**なれ**を導く**序詞**

○なれは着なれるの**馴れ**と馴れ親しむの**馴れの掛詞**

○つまは服の裾をさす**棲**と妻の**掛詞**

○はるばるは着物を張るの**張**と遠くはるばるの**遥々の掛詞**

○き(ぬる)は**着**と**来**の**掛詞**

○着慣れ、**棲**、張る張るは**から衣**の**縁語**

とよめりければ、皆人、乾飯の上に涙落として、
と詠んだので、一行の人はみな、乾飯の上に涙を落として、
ほとびにけり。

乾飯がふやけてしまったのだった。

行き行きて、駿河の国に至り 完了・終止ぬ。宇津の山に至りて、

さらに進んでいって、駿河の国に到着した。宇津の山に着いて、

わが入ら 意志・終止むとする道は、いと暗う細きに、つた、かへ
自分が入っていこうとする道は、大変暗くて細い上に、つたやかえ

では茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、
では茂り、なんとなく心細く、思いがけない目にあうことだと思っていると、

修行者会ひたり。 ラ変・連体「かかる道は、 副詞・どうして係助詞サ変・連体係結びいかでかいまする。」と

修行者がこちらに来合わせた。「こんな道に、どうしていらっしゃるのか。」と

マ行上一。已然接助・順確

過去・連体

断定・連用 詠嘆・終止

言ふを**見****れ****ば**、**見****し**人**なり****けり**。京に、その
言うのを見ると、（京で）見知った人であった。（それで男は）京に、その

人の御もとにとて、文書きてつく。

人の御もとにといつて、手紙を書いて託す。

所在存在・連体

駿河**な****る**宇津の山べのうつつにも

私は駿河にある宇津の山のあたりまでやってきたがそ

現実

の山の名のうつつでも、

断定・連用 詠嘆・終止

夢にも人にあはぬ**なり****けり**

あ た な は 私 を 忘 れ て い る の か

夢の中でもあなたに会わないことである。

さつき つきがわり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れ**り**。
存続・終止

富士山を見ると、五月の末なのに、雪がたいそう白く降り積もっている。

打消・連体

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか

係助詞

時節をわきまえない山は富士の山である上、今をいつだと思って

格助・主格

鹿の子まだらに雪の降るらむ

現在推量・連体係結び

鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろうか。

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね
その山は、ここ京で例えるならば、比叡山を二重ほど重ね

婉曲・連体

あげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

断定・連用係助詞

過去・連体係結び

あげたような高さで、形は塩尻のようであった。

なほ行き行きて、武蔵の国と下総の国とのなかにいと
さらにまた先へ進んで、武蔵の国と下総の国との間にとても

ナリ活用・連体

大きな川あり。それをすみだ川といふ。その川のほとり
大きな川がある。それをすみだ川と言う。その川のほとり

に群れゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも来完了・連用に

に集まり、腰を下ろして(京に)思いをはせるので、この上もなく遠くに来て

過去・連体終助詞・詠嘆

嘆く

存続・連体接助・単純

けるかな、とわびあへるに、渡し守、「はや船に
しまったなあ、と嘆きあっていると、渡し守が、「はやく船に

乗れ、日も暮れぬ。」と言ふに、乗りて渡らむとするに、
乗れ、日も暮れてしまう。」と言うので、乗って渡ろうとするが、

副詞・強調

皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さ
一行の者たちは皆つらくて、京に恋しく思う人がいないわけではない。

格助・同格

形容詞ク活用・連体

るをりしも、白き鳥の、はしと脚と赤き、鳴の大
そうした折も折、白い鳥で、くちばしと脚が赤い、鴨の大

断定・連体

や行下二・未然

きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見え
きさである鳥が、水の上で遊び、遊びしては魚を食べる。京では見え

打消・連体 断定・已然

ぬ 鳥なれば、皆人見知らず。渡し守に問ひければ、
ない鳥なので、一行の者たちは誰も見知っていない。渡し守に訪ねたところ、

係助詞（結び省略）

「これ な む 都鳥。」と言ふを聞きて、
「これこそ都鳥（である）。」と言うのを聞いて、

ハ行四段・未然（仮定条件）

意志・終止

名にし 負 は ば いざこと問は む 都鳥
（京という）言葉を名として持っているならば、さあ訪ねよう都鳥よ

わが思ふ人はありやなしやと

私の愛する人は元気でいるのかいないのかと

マ行四段・命令完了・連用過去・已然接助・順確

と よ め り けれ ば、船こぞりて泣きにけり。

と詠んだので、船に乗っている人たちは全員泣いてしまったのだった。